

「アジア主義者」と雑誌『成功』（一九〇二—一六）

——「いざない」のなかの中国イメージ——

久保田 善 丈

はじめに

中国大陆に新たな可能性を見出した成功者、可能性の舞台への「いざない」の語り部、そして、そのような意味での青少年たちのいわば「ヒーロー」。我々がよく知っている「アジア主義者」⁽¹⁾たちにはこのような側面があったと考えられる。当時の青少年向け雑誌をひもとくならば、グラビアを飾る時の人としての、そして、立志伝の主人公としての「アジア主義者」たちをしばしば目にすることになるからである。

近年、さまざまな方法論によって超領域的に近代におけるアジア認識が問題とされている。⁽²⁾そして、そこではアジア論の主体にだけではなく、大衆文化のあり方にも目を配るという意識が共有されつつあるようにみえる。しかしながら、例えばいわゆる「アジア主義者」を扱うとき、大衆文化とのかかわりやその意味についてはほとんど顧みられることがないのである。このことは、近代におけるアジア論の主体と大衆について、それぞれのアジア認識

が相互連関を十分に問われぬまま議論されていることを示唆している。⁽³⁾

また、歴史学の文脈では多くの場合「侵略―連帯」という枠組の二元論を否定するというスタンスが共有されている。しかし、そこでの「侵略―連帯」論は「侵略」と「連帯」の間の多様な局面を視界から排除してしまうという意味で否定されているのであって、アジアにおける「連帯」については、それが「真に」志向されるならば、それ以上の批判的検討対象とはならなかったのである。⁽⁴⁾ しかもこの枠組は、次のような研究動向のなかで温存されてきた。例えば近代日本の「対外硬」を取り上げる場合、その意図に関わりなく「アジア主義」の「侵略」性は結果的に確認されることになり、その議論はそこで「侵略」主義的とされた集団や個人の言動を「多様な局面」から直す流れを喚起するのである。それは東亜同文会の位置づけなどをめぐって現れ、「侵略―連帯」の枠組をはからずも強化する。⁽⁶⁾ 同時に、やはり「多様な局面」を意識しつつ「あるべきアジア主義者」を見出さんとする研究潮流がみられるが、⁽⁷⁾ しかし、「あるべきアジア主義者」はそうではない存在を前提とせざるを得ないのである。そして、以上の議論は「侵略」を対極に置き、アジアとの「侵略」的でない、いわば「あるべき連帯」に価値を置くことに關して、それを前提とすることにおいて共通しており、結果的に「連帯」自体に内在する問題にアプローチする契機を見失ってきたのである。

一方、「オリエンタリズム」批判等の文脈で問題となるのはアジア認識の主体の自他イメージであり、その「まなざし」である。したがって「侵略―連帯」の枠組は必ずしも必要とされないが、しかし、例えばそこでの中国は決定的に「まなざし」の対象であり、中国もまた「まなざし」の主体であり、序列付けの主体であって、その意味

で良くも悪くも近代的な存在であることが結果的に隠蔽されてしまっているのである。⁽⁸⁾

このような状況に対して、本稿では以下のように考えていく。例えば、清末中国の変革論者はしばしば明治維新をそのモデルに想定する。そこでは「清末中国」は「幕末日本」であり、一方、彼らとの「連帯」を求める日本の「アジア主義者」たちにとっても「清末」は「幕末」であり、中国は彼らの支援のもと「維新」へと向かうことになるのである。この変革モデルの共有について、本稿では次のような発想があり得ると考える。すなわち、そこでは中国と日本が、西洋化を近代化、文明化とみなす時系列的発展論によって位置づけられており、⁽⁹⁾したがって我々はその間に世俗的社会進化論の影響が及んでいる可能性を視野に収めるべきではないか。⁽¹⁰⁾だとすれば、この場合の「連帯」は日中双方が中国の「後進」性を前提とすることによってはじめて成り立つことになるのである。そして、このような観点に立つならば、「アジア主義者」たちについて、それを「侵略」と「連帯」の間の「多様な局面」から位置づけたとしても、それだけでは問題に対応することはできないと考えられるのである。こうして我々は、「連帯」自体が——それが「真」の連帯であるか否かにかかわらず——内包する問題にアプローチすることになると同時に、「まなざし」の主体としての中国を視野に収めることになるのである。⁽¹¹⁾ただし、後者の問題については別稿に譲ることとし、以下、前者について、その大衆化の問題を意識しつつ議論を展開していきたい。

すなわち、本稿は「アジア主義者」たちについて、その志向如何にかかわらず、彼等が提示した中国イメージとそれを支える「まなざし」のあり方を問題とする。そして、冒頭の一節はこのような文脈で意味を持つことになるのである。すなわち「アジア主義者」たちは彼等自身メディアを通じて大衆化しており、彼等は時に「ヒーロー」

でさえあった。そうであれば、我々は次のような点に留意すべきだろう。メディアが「ヒーロー」を語るとき中国はどのように描かれるのか、メディアで「ヒーロー」が語るとき中国はどのように描かれるのか。そして、こう考えたとき我々の目は雑誌『成功』に向けられることになる。それは二〇世紀初頭、最も広く読まれた青少年向け雑誌のひとつであり、「ヒーロー」としての「アジア主義者」による中国への「いざない」を執拗に展開した雑誌だからである。

1 可能性の舞台と「アジア主義者」たち——投書欄「記者と読者」——

(1) 雑誌『成功』と可能性の舞台

『成功』は当時のいわば立身出世ブームに乗って文字通り成功した雑誌である。⁽¹²⁾ 創刊の翌々年には「読者数一万五千」を、五年後には、「東洋一の発行部数」を自称し、一三卷一号（一九〇八年）「時評」には『成功』を模した書籍、雑誌が出回っており迷惑しているという一節も見られる。⁽¹³⁾ この雑誌の読者層についていうと、それは、小学校を出て働きながら立身出世を夢んでいる青少年、中学に入って将来の飛躍を考えている苦学生、あるいは無為のまま苦学生を自称する青少年等であり、つまり、『成功』は「庶民の立身出世主義に対応した雑誌」⁽¹⁴⁾として受け入れられていたのである。また、このことは『成功』が「資本なき青少年」をターゲットとする「いざない」の雑誌であったことをも同時に意味する。⁽¹⁵⁾ そして、投書欄「記者と読者」にはこういった特徴を示す多くの事例が存在するのである。⁽¹⁶⁾ つまり、『成功』には二〇世紀初頭日本の大衆的志向を反映するという一面があり、この点において

様々な分析の対象たりえると考えられるわけだが、これまで歴史学の文脈で取り上げられることはほとんどなかった。⁽¹⁷⁾一方、さきにふれた近年の研究潮流のなかで、例えば、文学研究からのアプローチが見られる。そこでは『成功』にしばしば掲載される「立志小説」が取り上げられ、それによって近代日本の海外進出、殖民といった欲望のあり方が問題とされる。⁽¹⁸⁾そして我々はこういった研究によって『成功』の立身出世主義が、海外への、そして中国への「いざない」を内包する点に留意することになるのである。

上述のように『成功』の読者たちは基本的にさまざまな意味で「資本」を欠いており、したがって、つねに自らの可能性の乏しさに直面せざるをえず、それはしばしば国内における立身の困難さとしてとらえられた。⁽¹⁹⁾そして、このような状況にある読者たちに対して、『成功』は可能性の舞台として「外」を提示することになり、読者もそれに呼応するのである。「私は学もなければ智もなく家計として赤貧洗ふが如くなる中よりも如何にして世に出んとし居折柄貴社発行の成功雑誌を或る人の寄送する所となり、初号より今に為読致に付けて奮発心愈起り是非米清韓何処にか問て農業と牧畜を業となし一旗挙げんと思ひます」(「記者と読者」五十四、一九〇五年、五四頁)。

五巻一号(一九〇五年)には付録として『清韓露事業案内』が付され、そこでは船賃、宿舍の様子から有望産業まで詳細なレクチャーが展開される。また、七巻四号(同年)は「戦後職業案内」という特集号で、日露戦争後有望となるであろう職業を列挙し、現場の声を紹介している。そこではまず一二の職業について総論が示され、それを受けて三一の具体的な職業の各論が展開される。総論は例えば、「戦後の工業家」「戦後の新聞記者」という一般論で話がすすめられるが、中国に関しては「戦後清国開業医」として唯一具体的項目が立てられている。また、各

論に目を移すとそこには、「書籍出版業」「煙草商」等のなかに、「清韓語学者」「清韓行教師」「清韓行靴商」等の項目が存在する。そして、これらの項目に現れる地名は「清」「韓」「樺太」のみであった（七一四、一九〇五年、「目次」参照）。

同号の彙報欄では、よりあからさまな「清韓」への「いざない」が展開される。「日本の内地にては近來中々に秩序だち少しばかりの技量の者にては容易に好地位を占めるを得ざる事なるが、清韓は今や恰も我国の維新當時に均しければ、少しく手腕ある物は…福沢翁の爲したる事業も洪沢氏の爲したる事業も新島氏の爲したる事業も皆彼地に於て之を行ふを得べし、…往きて此開拓者たらんとする人はなきか」（同上、一〇〇頁）。

そして、『成功』にとってこれらの「事業」をすすめることはすなわち「文明化の使命」を果たすことを意味した。同じ欄には「同仁会医学校設立」⁽²⁰⁾にふれて次のような見解が展開されているのである。「斯の如きは誠に東邦国民の先進民族たる日本人民の正に爲すべき所」であり、「希くは…我國の開業医をして続々清韓地方に往かしめ、彼地に於て親しく文明的医術を施し遣りたきものなり」（同上）⁽²¹⁾。ここでの「文明的医術」は西洋医学であり、「先進」、「文明」が「西洋的であること」との距離で測られていることに疑いの余地はないだろう。

『成功』は可能性と使命の強調によって読者を「清韓」へといざなう。そしてこのとき「清韓」は、「秩序」がなく、「先進民族」でないことによつて日本の「先進」性とそれに伴う使命を際立たせると同時に、それによつてまたない可能性の舞台たりうるのである。

投書欄「記者と読者」にも次のようなやり取りが見られる。例えば、大実業家をめざしているという読者が渡米

について質問したのに対して、記者は「我国今日の形勢を以てすれば」として「満韓シベリア」をすすめる。そこは「無限未開の富源」だからであった（四一五、一九〇四年、四四頁）。次のような「いざない」も見られる。「南清に往きて行商を営まんとす、果して有望なるべきや」と問う読者に対して記者は、聞けば彼地は暮らしやすいらしいし、「日本内地にありて徒に煩悶し居るよりは彼地に赴くを可なりと信ず」（一〇一五、一九〇七年、六三頁）とするのである。

『成功』は可能性の舞台としての「清」と「韓」についてもはっきりとそれを差異化していた。例えば、韓国で商売をしているが見込みはどうかという読者に対して、記者は次のようなアドバイスを送りこの青年を中国へといざなうのである。「事業家とか富豪家とか乃至政治家とか文学家とか大商人とかになるには韓国は適當の地に非ず宜しく進んで支那に入り其志を立つべし」（六一四、一九〇五年、五二頁）。

日露戦争前後『成功』は明らかに東アジアに可能性の舞台を想定し読者をそこにいざなっていた。⁽²²⁾そしてそのなかにあつて中国は、さまざまな使命の対象として、大きな志にこそふさわしい舞台として提示されるのである。

(2) 「ヒーロー」としての「アジア主義者」たち

日露戦争前後に誌上で展開された上述の海外雄飛熱は同時に現実的な色合いを強めていき、例えば「記者と読者」欄も受験指南、就職案内の様相を呈することになる。⁽²³⁾しかしこのような状況は必ずしも読者の海外志向の減退を意味しない。一九〇九、一〇年の各号「記者と読者」欄には受験、就職等の項目と並んで海外専門のコナーが設け

られているのである。そして、こういった現実主義的志向と海外雄飛の野望は次のような形で結びつけられることになったと考えられる。

『成功』は上海東亜同文書院や東洋協会専門学校、台湾国語学校等の「学校案内」を積極的に掲載⁽²⁴⁾、そして、読者からもこれらの学校に関する問い合わせが続々と寄せられるのである。このとき『成功』と「資本なき青少年」たちはそこに、重みを増しつつある学歴への志向と海外への志向を同時に満たす道を見出したと考えられよう。また、これらの学校についての「学校案内」はときに三頁にわたって掲載され、そこでは客観的な受験情報、学校紹介のほか以下に示すような「いざない」がやはり展開されていた。

師範学校たる台湾国語学校については、それが「野児啓発の目的を以て創設された」こと、そしてそれ自体困難であるうえに、気候、風俗等の違いにもふれてこの事業が大きな試練を伴うことを強調するが、一方で給与等待遇の恵まれていることを示し、さらに次のようににつづける。「夫れ精神上の快感に至つては、恐らく是れに過ぐるものはあるまい。蛮児啓発を以て自己畢生の目的となし、撓まず倦まず彼等を教育したならば、日に月に文明化する彼等の顔を觀て、其の間に云ふ可からざる樂しみが生ずるであらう」(二五—二、一九〇八年、五〇頁)。そして、「いざない」がこのように展開されるならば、そこでの台湾の「野蠻」性は不可欠であつたといわなければならない。読者が担うことになる使命の崇高さと好待遇はそれによつてはじめて保証されるからである。

上海東亜同文書院については、東亜同文会との關係が明示されると同時に、「その目的とする處は清國の開發と云ふ点にある」と続けられる。そして、人員過剰の内地であくせくするよりも「好望ある清國」に立脚点を求める

ほうが「意気あり大抱負あるものの、最も快事とする処ではないか：将来清国に向つて大に雄飛せんとするものは来れ」とするのである（一八一二、一九一〇年、七三頁）。この場合の「好望」が「開発」の余地を前提とすること、すなわち中国の「後進」性と親和性を持つことについては説明を要さないだろう。

これらの学校について読者は例えば次のような質問を寄せる。「在上海東亜同文書院を卒業致した後は如何なる方面に如何なる活動を致す者に候哉、東亜の風雲に心寄せて渡清せんとする愛国児のために詳に御知らせ被下度候」（記者と読者）二三一六、一九二二年、九五頁。東亜同文書院に学歴と「愛国」という二つの志向を託したであろうこの青年にとつて、中国は「風雲」の大地であり、そこでの活躍は「愛国」を意味しなければならないのである。

一方『成功』は軽はずみな海外雄飛熱に対して警鐘を鳴らしていた。例えば一一巻一号（一九〇七年）「記者と読者」では、南清の行商等に関する質問に対して次のような議論が展開される。「今回右の質問者実に数十の多きに達す、君らの壮図に賛すも熟慮成算の上ならず徒らに未知の地に単身行商に従事するは武器なき戦闘をなすと同じく其苦辛言語に絶す」。また、先に生活しやすいとして読者に勧めた「南清」にふれて、そこは「暑氣烈し」く健康な者でも風土病で斃れる場合が少なくないとし、さらに「若し夫れ一時の出来心のため空想を追はんとするが如きものは誠に誠めざるべからず」とするのである（五八頁）。

しかし『成功』は中国への「いざない」をやめない。記者は次のように続けるのであった。「斯く云へばとて君等を以つて尽く一時の出来心なりとは断ぜず故に千難万苦死地に入るも猶辞せざる一大決心あらば進んで行くべし：旅費及同地の模様等は郵船会社並に南清売葉の祖たる東京橋銀座の岸田吟香氏商店等に就て親しく聞かれたし」

(同上)。

ここに至って中国での——ここでは商業的な——成功は「一大決心」のもと「千難万苦」を乗り越えた者のみか手にするところとなる。記者は中国行きに高いハードルを設けることによって、つまり読者を差別化することによってその野心をおおるのである。そして、そうであれば読者は「岸田吟香」に自身をアイデンティファイしていくのではないか。ここでの岸田は「一大決心」のもと「千難万苦」を乗り越えた成功者にほかならず、その希少性において「ヒーロー」と呼ぶべき存在として現れたことになるからである。

こうして、『成功』誌上には名高い「アジア主義者」たちがつぎつぎと登場することになる。『成功』は彼らを中国に関わるに当たって「一大決心」のもと「千難万苦」を乗り越えた者と見なし、そのような存在として彼らを語り、そして彼らに語らせるのである。

例えば、読者は次のような記事を目にすることになる。陸実「戦後の日本人は如何にせば海外に成功すべき乎」(五一―、一九〇四年)、自助庵「三宅雄次郎君立志談」(五一五、一九〇四年)、岡田蕉南「清国成功者白岩龍平君立志談」(六一四、一九〇五年)、岡田蕉南「竹越與三郎君立志談」(六一五、一九〇五年)、堀内新泉「事業界偉人岸田吟香翁成功譚」(七一―、一九〇五年)、嘉納治五郎「支那留學生教育学校宏文学院経営譚」(九一―、一九〇六年)、犬養毅「清国怪傑袁世凱人物評」(二四―四、一九〇八年)、長田偶得「怪傑頭山満君立志譚」(二五―二、一九〇八年)、根津一「清国世界的大商戦の将来」(二五―三、一九〇九年)、福本日南「時代の風潮に逆らって立て!」(二五―四、一九〇九年)、石川半山「清国成功者川島浪速君奮闘経路」(二六―六、一九〇九年)。。

このうち岸田の「成功譚」では、日清戦争後、国難を憂う中国の改革派が「文明の学芸」に学び、中国の富強化をはかろうとしたこと、岸田は近衛篤磨と図つてその動きを支援すべく東亜同文会を設立し、それによつて「東亜の時局を健全に維持し、国勢を振興せむことを企てた」ことが語られる⁽²⁵⁾。そして、我々は、このくだりが「翁と慈善事業」(七一、一九〇五年、一二三頁)という項目に見られることを重視しなければならない。このとき「連帯」の対象たる中国は同時に「慈善」の対象なのであり、つまり、「欠如」の文脈で現れることによつて、岸田の英雄化に寄与することになるのである。

また、「アジア主義者」たちは次のような形でも誌上をにぎわしている。連載「明治名士逸話」には頭山満、福本日南等がしばしば顔を出す。例えば「福本日南君と囲碁」(九一六)、「頭山満君の高斟」(一〇一五、一九〇七年)等の記事が載つて、その機知、奇才、豪傑ぶりが紹介されるのである。また、読者からは、三宅雪嶺、竹越與三郎等の文章はどこで読めるかといった質問が寄せられる(一一一、一九〇七年、五七頁)。二二卷二号(一九一二年)は「浪人号」とされ⁽²⁶⁾、そこにも「アジア主義者」たちが名を連ねるとともに、「現代著名の八名士」として福本日南、三宅雪嶺、「浪人界の巨人」として頭山満、「浪人界の偉傑」として犬養毅等が巻頭のグラビアを飾るのである。

上述のように雑誌『成功』誌上における「アジア主義者」たちの活躍については枚挙に暇がないが、端的にいつてそこでの彼等の言説、あるいは彼等をめぐる言説には次のような共通点が見られる。それは、「苦学」の強調、少数性の強調、「アジア主義」的な使命感やそれと親和する類の意志の強調であり、さらにそういった意志のあり方によつて彼等を大多数の「つまらぬ野心」を持った「東洋流の豪傑」⁽²⁷⁾から差別化するという論理であつた。こ

してこれらの言説は全体として、そのような人物であれば中国へ来たれ、という「いざない」を構成するのである。つまり『成功』は彼等「アジア主義者」たちを読者たちの「ヒーロー」たらしめるべく語り、語らせていた。そして、そうであればこのとき中国は彼等を「ヒーロー」たらしめるべく描かれることになり、「いざない」を成立させるために語られるということになる。本稿が問題とするのは、そこに浮かび上がる中国イメージに他ならない。それは誌上の「アジア主義者」たちに「ヒーロー」を見出したであろう多くの読者たちに提示された中国イメージだからである。

2 「いざない」のなかの中国

ここでは『成功』誌上において「ヒーロー」として現れる、それぞれ「アジア主義」的な「豪傑」と「実業家」に注目し、彼等による、そして彼等をめぐる「いざない」の言説を取り上げておきたい。それによって、「アジア主義者」による「いざない」のなかの中国がつねに一定の像を結ばざるをえないこと、そして、それが拡散、浸透していくであろうことが示唆されるからである。

(1) 「豪傑」たちの中国

石川半山「清国成功者川島浪速君奮闘経路」(二六―六、一九〇九年、二―七頁)はその冒頭、「清国に来て…成功を得たる日本の人物が、随分沢山有るが、北京に於て第一に祖国の同胞の間に紹介すべき人物は、巡警学堂の監督

川島浪速君である」とした後、彼を「沢山有る」他の成功者とは區別して次のように述べる。「日清兩國の親交」は、政府間の交渉のみで成立するわけではなく、「個人にして清國人の間に重きを置かる所の川島君の如き人物が、各地に現はれ、各方面に活動する様にならなくては、真に日清兩國国民の親交を結合して、十分に東洋の平和を確保するに至るまい」(同、二頁)。川島は、他の多くの成功者たちとはこの意味で異なる存在として、つまり、「真」の「結合」による「東洋の平和」を構想したという意味での先達として誌上に現れるのである。

川島の学生時代を扱った文脈では彼の存在の少数性が強調される。青年期を前にした彼は「欧化主義の大潮流」のなかに身をおくことになるが、彼はだからこそ「支那語科」を選択したとされ、欧化を拒絶するその行為は「一種の癩癰」でもあるが、同時に「何人も屈す可らざる一片の氣骨」の現れであり、その意気は「壮とせざるを得ない」とされるのであった。この「氣骨」は卒業後の進路決定にも現れ、彼は多くの同級生が官途に就くならば、と考えてひとり「浪人」の道を選び、上海へ渡るのである。

彼は「或る大事業を成さんとの希望を抱て、清国上海に來た」(同、五頁)。そしてそこでの五年間について最初に取り上げられるのはその慘憺たる生活ぶりであり、同時に強調されるのは「貧窮の中に平然として心胆を練磨した事」であった。そこでは例えば、「支那豪傑と称せらるる連中」宗方小太郎、井手三郎等と「共に東洋の大勢を論じた」というエピソードが紹介されることになる。そして、日清戦争後帰国した彼は「暫く風雲の來るのを」待つことになるのである(同上)。ここでの中国は「苦学」の場であるとともに「豪傑」をはぐくむ大地であり、あるいは「風雲」を求める「豪傑」たちの可能性の舞台であった。

一九〇〇年、彼は列國軍管理下の北京にあつて日本軍通訳官として義和団事件に参与するが、その働きは通訳官のそれをはるかに超えたという。「多くの清國人は彼に依て救はれた、主公貴族にして惡漢の爲に禍に罹り、非常の苦境に陥っている者を見ると」、川島はそれを座視せず、「憐れむべき人々を救ふたので、彼の声望は忽ちにして北京城の内外に高まつた」のである（同、六頁）。そして、その後警察事務が中国側に移管されると川島は清朝から警察学堂の経営を一任されて警察官の養成に当たる。そして、「兎にも角にも警察制度が設けられ到る所に警察官が有て、各地の警察に任じている様になつたのは、全く川島君の功勞で、之は清国政府及び國民が、常に多大の感謝を払ふて居る所」（同上）なのであつた。⁽²⁸⁾

彼がなそうとした「或る大事業」とは中国の「文明化」であつたといえよう。「川島伝」のなかの彼は、義和団を契機とする「風雲」のなか、中国の「憐れむべき人々」を救ひ、彼等に近代的国家のあり方を提示してその方向へと導いたのである。すなわちここでの川島はその「アジア主義」的志向の実践者という意味での「ヒーロー」であり、その点において雑誌『成功』の誌面を飾つたのであつた。そしてそうであれば、ここでの中国は、「憐れむべき人々」とそれを生み出す諸要因、そして前近代性によつて構成され、それを克服すべく「ヒーロー」の登場を待つ大地でなければならぬのである。

タイトルには「談」とあるが、岡田蕉南「清国成功者白岩龍平君立志談」（六一四、一九〇五年、九一—三頁）は岡田による「白岩伝」の形をとっている。詳細は後述するが、白岩は荒尾精の知遇を得たことによつて日清戦争後、大東汽船、湖南汽船を設立した実業家であり、⁽²⁹⁾つまり、「白岩伝」は読者を中国における実業へといざなうことを

目的とする記事であつた。

もちろん主人公は白岩だが、ここでは荒尾精について全体の二〇%強を割いてその事績が紹介され、荒尾もまた「ヒーロー」として描かれる。そして、中国は荒尾の背景として現れ、それは白岩や荒尾の「アジア主義」的志向と結びつくことで「いざない」としての「白岩伝」にとつて決定的な意味を持つことになるのである。⁽³⁰⁾

荒尾は次のように紹介される。「何時となく身を万里未開の隣邦夷風蛮俗の域に没し、鴻爪隨処に遍くして具に大陸の形勢を察し、其間筆舌写し難きの千苦万酸を嘗め、以て幾多の貢獻を祖国に致したりき」(同、一一頁)。ここでの中国が意図的に「野蛮」化されていることは一見して明らかだろう。しかし、舞台である中国をこのように表象するだけならば、この「白岩伝」は「いざない」の言説としては不十分といわざるをえない。ここでの中国は、中国における実業への「いざない」の文脈で現れているにもかかわらず、少しも利益をもたらしそうにないからである。そして、それを埋め合わせるものとして「白岩伝」が強調するのが白岩における「文明開拓の先達」性であり、荒尾の「アジア主義」的言動なのである。「荒尾精氏は、真に是隠れたる一個当代の豪傑なりき……一介の武弁と雖も、懷抱は常に人と齊しからず、補車唇齒の国交は例ひ一時破るるも、前途は応さに彼我親睦して東洋の利益平和を保護せざるべからずと覲するや……日清両国の事情互ひに疎通するの必要急務を説き、一方には上海に所謂大國研究の学舎を建て、普く天下に有為有志の子弟を募り、之を養ひ之を用い、以て邦家万年の策を他日に講ぜしめんとしたるなりき」(同上)。

ここでの荒尾はその「アジア主義」的発想によって少数の先覚者という地位を獲得し、そして、その中国行きに

つてはそれが「アジア主義」的発想にもとづいた使命であることが強調されるのである。そうであれば、荒尾に關する二つの引用は次のことを示唆する。すなわち、荒尾を、国家のため中国のためアジアのために奔走した「ヒーロー」と位置付けるならば、その一方で中国は「万里未開の隣邦」「夷風蛮俗の域」でなければならぬし、「筆舌写し難きの千苦万酸」をもたらず場所であればならなかった。それによつて「ヒーロー」の「貢獻」が輝くからである。と同時に、中国がそのような場である以上、「いざない」を成立させるためには、中国行きはそれ自体崇高な使命を伴うものでなければならなかったのである。こうして「いざない」のなかの中国は二重の意味で「野蛮化・後進」化されることになる。すなわち、「ヒーロー」を「ヒーロー」たらしめるためにも、「いざない」を成立させるためにも中国は「野蛮」化、「後進」化を強いられることになるのである。

一方で、『成功』は「豪傑」たちに対して手放してではない。むしろ「東洋流の豪傑肌」や「つまらん野心」を持った青年たちには極めて批判的であり、しかも、それが中国へ渡る日本人の大多数であるとする記事も見られる。そして、川島や荒尾はこのような「豪傑」や「野心家」たちとは異なる、「あるべき豪傑」として誌上の「ヒーロー」たりうるし、この意味での彼等の少数性を支える要素のひとつが、「アジア主義」的志向とその実践であった。⁽³³⁾一方、『成功』は具体的な成功を求める読者にとつてより現実的な「ヒーロー」の提示も忘れない。そして、以下に見る「実業家」白岩龍平はこのような意味で『成功』にとつても読者にとつても重要な存在であつたと考えられるのである。

(2)「実業家」の中国

「白岩伝」の冒頭、白岩は次のように紹介される。「清国江蘇浙江の二省を通断せる水路約五百哩の運河」を「十隻の小蒸気船」で往来する大東汽船、「湖南湖北三百二十哩の間、蛟龍の濤を蹴て奔り鯨鯢の潮を噴いて泳ぐが如き各一千噸の二大汽船」を擁する湖南汽船、そして、その「重任と実権とを一身に担」うことによって「日清貿易の嚮導」であると同時に「文明開拓の先達」の役割を果たしたのが白岩龍平であり、にもかかわらず彼は「無名の成功者」なのである（同、一〇頁）。ここでの白岩はその成功と役割の壮大さが強調されることによって明らかに英雄化されているが、同時にその「無名」であることが示される。つまり、白岩は雑誌『成功』が読者に提示すべく発見した「ヒーロー」であった。まずは「白岩伝」を四つの部分に分け、その要約を示しておきたい。

①故郷…白岩は岡山の生まれ。同郷宮本武蔵の英雄譚を耳にしながら少年期までをそこで過ごす。そしてそこは「草深き片山里」であった。②東京…白岩は村の学校を卒業した後、漢籍を学びつつも五年間を畑仕事に費やす。白岩の東京へという気持ちは容易には実現しなかったのである。しかし彼はついに家を飛び出して東京へ向かう。ところが東京では職も見つからず、放浪。一時は「巷に乞米の徒と伍を為」という有様であったが、新聞広告を頼りに書店に職を得る。白岩は配達の書籍を読みあさるなど寸暇を惜しんで努力する。③中国…苦境に負けない努力は報われることになる。白岩は荒尾精との出会いによって決定的な機会を得るのだ。これもきつかけは新聞広告であった。白岩は荒尾の日清貿易研究所で将来を嘱望される学生として学ぶことになる。しかし学生の多くは日清戦争に動員され、そこで悲惨な最期を遂げるし、荒尾までもが急死する。残された白岩は不幸な友人たちと師の志

を継ぎ中国での起業をめざすが、同志河本磯平の自殺という悲劇にまたも直面することになる。しかし白岩はむしろこれらの悲劇を糧とし、ついに大東汽船、湖南汽船を起こすことになる。④むすび…「終りに臨んで特筆一事之を讀者に告ぐ、曰く白岩龍平君は正に明治五年の生まれにして、所謂而立の齡を越ゆる僅かに四春秋今猶紅顏白面の一青年なりと」(同、一三頁)。

ここでの白岩は学歴がなく、地理的にも経済的にも恵まれない少年であり青年であった。また、彼が特別な人脈を持たないことはその転機が新聞広告によることから知れよう。そして、荒尾との出会い、多くの読者の注目を集めていた東亜同文書院の前身たる日清貿易研究所入学によつて道は大きく開かれるのである。つまり白岩は『成功』が対象とする青少年そのままの存在として描かれ、彼等の志向を体現する存在として提示されるのであった。結びの一節はそういった青少年たちに「ヒーロー」との自己同一化を強く促すものといえよう。そして我々は、荒尾の文脈で現れた「アジア主義」的使命感と「野蠻」化、「後進」化された中国が白岩の背景としても機能することに留意しなければならないのである。

「大東湖南両汽船会社苦心経営履歴」(九一、一九〇六年、一五頁)では白岩自身が読者に語りかける。⁽³⁴⁾その冒頭白岩は「自分の為し来つたのは、最も困難にして失敗し易き支那の事業である」とし、つづけて「実業志望の青年に向ては或は多少参考となるやも計られぬ」と語る(同、一頁)。つまり、彼はここで、自らを苦心の末成功した「ヒーロー」として「資本なき青少年」をいざなうのである。

日清戦争後、すなわち大東汽船設立時期の状況について白岩は「同志望を懷抱する者決して少なくなかったが、

彼等の内情を精細に調査すれば、多くは清、米両国人の無頼漢の結合に非ざれば、国家的觀念無き日本人の山師的計画に過ぎぬ」(同、二頁)として、自らを差異化する。そうであれば、ここでの白岩の自己イメージは、「虚業」家ではないという意味での、国家的觀念に基づいた、まさに「実業」家ということになろう。

白岩はさらに次のように述べて、その決心の程を強調する。「当時平和克復後間も無い事として、支那人の日本人を見る事蛇蝎も吝ならず、その結果吾が事業に向つても、地方官は妨害を試み、土人は迫害を加へ、北京政府すらもあらゆる手段を以て計画を破壊せんとした」が「既に荒尾、珍田⁽³⁵⁾両氏の同意の下に事業に着手したる以上は、如何なる障害、困難も来らば来れ！」(同、一一二頁)。このとき白岩はあらゆる苦境に囲まれて孤立しながら「一大決心」のもと奮闘する「ヒーロー」であり、この場合、彼を「ヒーロー」たらしめるために不可欠な要素が頑迷な中国官民ということになるのであつた。⁽³⁶⁾

同じような構造を湖南についての語りにも確認することができる。「湖南は世人の知悉する如く、支那一八省中最も排外の氣風に富み、彼の内外蒙古の蛮烟中に入るをも辞せぬ欧米の宣教師さへ此処には其足跡を印し得ず、一の封鎖国なりとの言を發せしむる程の地である」(同、四一五頁)。にもかかわらずそこに航路を開いたのがほかならぬ白岩自身であり、そうであれば、ここでの湖南の「野蠻」性・「後進」性・險しさは白岩の業績に輝きを与えるために不可欠な要素なのである。

白岩は『東亜同文会報告』や近衛篤磨への書簡のなかで、湖南側の反応が意外にも好意的であつたことを伝えている。そしてそれは同文同種のなせるわざであるという考えも示していた。⁽³⁷⁾しかし、『成功』誌上での、すなわち

「ヒーロー」としての白岩は、湖南の難しさを強調しなければならないし、同時に「いざない」の主体でもある白岩は、次のように述べなければならないのである。「思へ、斯の如き地方に航路を開始せんとするは一個の冒険事業ではないか。雖然自分は亡友に対する義務と、又国家の前途より見て此封鎖國を貿易の市場と變ぜしむるは最も急務と考へた」(同、五頁)。湖南行きは「冒險」であり、道義的、国家的な使命であり、白岩は、困難な使命を果たすことの美しさを強調することによつて、読者をそこへいざなうことになるのであった。

「欧米各国の宣教師を見よ。彼等は自國の榮華の巷を捨てて支那に入るや、支那の服裝をし、支那の言語を操り、山河荒涼たる寒村の孤屋にさへ、ただ一卷のバイブルを抱いて寝ぬ事十年、二十年、財産の不安、生命の迫害を物ともせず、成功、失敗に頓着なく、一意神の福音を人類同胞に伝へんとする其熱心！」(同上)。

こうして「いざない」のなかの中國が二重の意味で「野蠻」化、「後進」化されざるを得ないことについては、ここでもそれを確認することになり、我々はそれが『成功』誌上に展開されることに配慮しなければならないのである。例えば、次のような青年が白岩の成功談、立志伝を読むのである。「将来海外貿易者たらんと希望す、由來家貧にして尋常小学校を卒業せしに過ぎず、味噌取次小売店に従事して今に至り已でに八年、未だ何の得る所なければ來春を期し断然店を辞せんと欲す」(八一、一九〇五年、五五頁)。ここに一定の想像力を働かせることは許容の範囲にあるのではないだろうか。

むすびにかえて——「連帯」の陥穽——

『成功』九巻一号（一九〇六年）は「成功者」が読者に語るといふ形式をとった増刊号で、中国人留学生学校宏文学院（一九〇二年東京設立）を主宰し、それを軌道に乗せていた嘉納治五郎はその業績によってそこに名を連ねる。⁽³⁸⁾

そして、成功談「支那留學生教育學校宏文学院經營譚」（九一、一九〇六、五一九頁）のなかで次のように文明化の使命論を展開し、読者を中国人教育へといざなうのである。すなわち、「彼の憐れむべき状態にある支那の、文化を開発し其の独立を補助して行くのは、隣邦の日本人民の任務」であつて、それはアジアの平和、日本の平和に結びつくと同時に、教育者の「活動すべき別方面」であり（同、六頁）、「此事業は困難には違ひないが、一方から言へば座しながらに支那の文化を開発して行くのだから、辛苦を償ふて余りある愉快も覚える」（同、八頁）と。⁽³⁹⁾

こうして我々はこのままで「いざない」の言説のなかに見てきたそれと同じ構造をここにも見出すことになるのである。すなわち、「いざない」のなかの中国はつねに「後進」的な、あるいは「野蛮」な存在であり、それゆえ憐れむべき存在としてときに潜在し、ときに現れた。中国はそうであることによつて「アジア主義者」たちの使命に、そして「資本なき青少年」が担うべき使命に輝きを与えると同時に、可能性の大地として、多くの読者を中国へといざなつてきたのである。つまり、「アジア主義者」を通じた雑誌『成功』における中国イメージの展開は、意識する与否にかかわらず、西洋的な価値を前提とした中国の「野蛮」化、「後進」化を必然的に伴つたといふことができる。そして、このとき我々は、雑誌『成功』の持つ大衆性を改めて想起すべきであり、かつ、以下の事実が

意味するところを視野に入れなければならないのである。

上述のように、中国を「野蠻」化、「後進」化した嘉納だが、一方で、彼は中国人を蔑視するような風潮には眉をひそめて、次のように続けている。「困ったのは当時は日清の干戈が収まった間際だから、支那人が往來を歩けば、子供は石を擲る、大人は戲弄ふといふ始末で：監督者として憂慮する事が屢々あつた」。つまり、この「成功談」では、「いざない」に伴う「野蠻」化、「後進」化、そしてそれを支え文明化の使命に内在する「オリエンタリズム」と、敗戦国民を侮る風潮を戒める「良心」がいとも容易に両立しているのである。⁽⁴⁰⁾

「侵略―連帯」の枠組は「連帯」に価値を置くことを前提とすることによって「連帯」自体に内在する以上の問題を結果的に隠蔽してきたというべきだろう。我々は、「良心」に基づいた「連帯」を通じて中国が一定のイメージの中に閉じ込められていく可能性を、そして、このことがイメージの大衆化と同時進行で展開していく可能性を視野に収めなければならないのである。雑誌『成功』における中国イメージの展開はこの点において重要な示唆を与えたというべきだろう。

一方で、我々は次の問題にも目を向けなければならない。冒頭部分でも触れたように「近代日本のオリエンタリズム」を問う文脈では、例えば中国が一方的に「まなざし」の対象として語られてきたこと、それによって一定のイメージのなかに閉じ込められてきたことがクローズアップされてきた。そして、この点については本稿も同様だが、しかし、そこでは「まなざし」の主体としての中国」という側面が視野から落ちてしまふし、それによって今度は中国自身の「帝国化」や「オリエンタリズム」の契機が近代において結果的に隠蔽されてしまうことになるので

ある⁽⁴¹⁾。しかし、日本がかつて「近代日本」であつたように、中国もまた好むと好まざるとにかかわらず「近代中国」であつたし、そうであれば、中国は単に近代の犠牲を蒙るにとどまらないはずなのである。今後我々は、本稿で提示した「連帯」自体に内在する問題を、近代日本の「アジア主義者」たちのみならず、「連帯」の対象のあり方をも含めて議論しなければならないだろう。

註

(1) 本稿で扱う一九世紀末―二〇世紀初頭の「アジア主義者」たちは、すべて先行研究によつて「アジア主義」的とみなされている人々。そしてそこでは、「アジア主義」について、それはすぐれて「状況」の産物であり、厳密な定義づけは困難にして時に無意味でさえあるという竹内好の議論(同編『現代日本思想体系九 アジア主義』筑摩書房、一九六三年、一一―一三頁)がふまえられていると見られる。本稿ではこの点について深入りしないが、ここでは本稿における一応の目安として、東亜同文会綱領を示し、以て、「アジア主義」的言説の典型のひとつとしておきたい。「支那を保全す、支那の改善を助成す、支那の時事を討究し実行を期す、国論を喚起す」(『東亜時論』一号、一八九八年二月)。

(2) その意図についていえば、それは基本的に近代以降の「日本」および「日本人」のあり方を問うことにあり、方法論、問題意識については、「オリエンタリズム」や「ポスト・コロニアル」をめぐる議論に触発されたものが目を引く。この意味での近年の論考は枚挙に暇がないが、例えば、栗原彬他編『越境する知6 知の植民地…越境する』(東大出版会、二〇〇一年)、金子明雄他編『デイスカールの帝国―明治三〇年代の文化研究』(新曜社、二〇〇〇年)、小熊英二『日本人』の境界―沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮―植民地支配から復帰運動まで(新曜社、一九九八年)、姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ―近代文化批判』(岩波書店、一九九六年)、小森陽一他編『近代知の成立 岩波講座近代日本の文化史3』岩波書店、二〇〇二年)等。中国研究からの取り組みとしては、例えば、小島晋治他編

「二〇世紀の中國研究—その遺産をどう活かすか」(研文出版、二〇〇一年)。日本近代史研究からは古屋哲夫編著『近代日本のアジア認識』(緑蔭書房、一九九六年)等。

(3) つまり、近代におけるアジア論の主体について、その言説の読み替えが進められる一方で、それとは別に、例えば大衆文学のなかのアジアが問題とされているのである。前者については「認識の基軸」として「文明」「人種」「文化」「民族」を設定しそれによって近代アジア認識を通史的に描く山室信一『思想課題としてのアジア—機軸・連鎖・投企』(岩波書店、二〇〇一年、とくに三一—一四二頁)が、後者については、金子他編前掲書第三章「内包される〈外部〉—越境と漂流」所収の諸論文がそれぞれ典型的な成果といえよう。

(4) こういった傾向が明確なものとして、日中関係史を「相互依存・競存・敵対」という局面でとらえることを提唱する山田辰雄の議論(同編『日中関係の一九〇年—相互依存・競存・敵対』東方書店、一九九四年、二—四頁)、それを受けての曾田三郎「序章—二〇世紀の歴史と日中関係」(同編著『近代日本と中国—提携と敵対の半世紀』御茶の水書房、二〇〇一年)、並木頼寿「近代のアジアと『アジア主義』」(『講座岩波世界歴史20 アジアの〈近代〉』

岩波書店、一九九九年)、中村義「アジア主義実業家論—白岩龍平と中国」(『歴史評論』六一四号、二〇〇一年六月)等。

(5) 例えば、酒田正敏『近代日本における対外硬運動の研究』(東京大学出版会、一九七八年)。

(6) 山本茂樹『近衛篤磨—その明治国家観とアジア認識』(ミネルヴァ書房、二〇〇一年)、栗田尚弥「引き裂かれたアイデンティティ」(ピーター・ドウス他編『帝国という幻想—「大東亜共栄圏」の思想と現実—』青木書店、一九九八年)等。また、岡本幸治編著『近代日本のアジア観』(ミネルヴァ書房、一九九八年)所収の諸論文。

(7) 近年の論考としては中村前掲論文及び同『白岩龍平日記—アジア主義実業家の生涯』(研文出版、一九九九年)、久保田文次「萱野長知と孫文—その中国との関わり、中国認識」(小島編前掲書)、狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察(1)」(『東亜』二〇〇一年八月、連載)等。

(8) 例えば「注2」に挙げた諸論考(小島編前掲書は別として)もこの傾向を免れない。

(9) 「アジア主義」的言説がこのような「オリエンタリズム」を前提とすることについては拙稿「東亜同文会の『使命』と『まなざし』」(『歴史評論』六一四、二〇〇一年)。

(10) 本稿が扱う雑誌『成功』は後述のように青少年を対象とする大衆的なメディアだが、そこにはスペンサーや坪井正五郎の評伝が掲載され、次のような一節も見られる。「スペンサーの事、彼の著書と学説とは普く我國の上下に知られ、児童走卒に至るまで、悉く其名を記憶し居る……」(高田大観「大哲学者スペンサーの生涯」『成功』五卷三号、一九〇四年、一〇頁：以下「五一三」と略記し、出版年、頁を付す)。また、『成功』誌上には、坪井正五郎「世界競争と日本人種」(同上)、加藤弘之「生存競争と世界の将来」(五一五、一九〇四年)といった記事が掲載され、日本が「世界の大競争場裡」の序列のなかに存在していることを大前提として議論が展開される。そして投書欄「記者と読者」にはハーバード・スペンサーの著作が売られている所を教えてほしいという読者からのハガキも寄せられるのである(一九一五、一九一〇年、九〇頁)。同じ頃の大手少年雑誌『少年世界』の投書欄に単純化された社会進化論によって世界を弱肉強食の世界と捉える議論を見出すことも容易である。近代中国における社会進化論の受容については佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』(東大出版会一九九六年)第一章。その大衆化の問題については触れられていない。

(11) 「まなざし」の主体としての近代中国に着目するものとして、Frank Dikotter『The Discourse of Race in Modern China』1992。近代中国の人種観が前近代以来その文化に内在する差別的な「まなざし」に由来することが論じられる。これに対し、近代中国の人種言説を社会進化論との関連で取り上げ、その点において近代のプレゼンスを強調したものとして坂元ひろ子「中国民族主義の神話ー進化論・人種観・博覧会事件」(『思想』八四九、一九九五年)。近代日本の人種論との比較を射程に収めたものとしては、Frank Dikotter, ed. *The Construction of Racial Identities in China and Japan*, Hurst, London. 1997. 「オリエンタリズム」に基づく中国イメージの近代日中における共有という問題にふれたものとしては石川禎浩「梁啓超と文明の視座」(『梁啓超ー西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房、一九九九年)。拙稿「中国保全論の『オリエンタリズム』と中国イメージー東亜同文会の『まなざし』と義和団事件」『中国21』一三、二〇〇二年)。また学会報告として拙稿「児童啓蒙雑誌のなかの中国ー『少年世界』・『蒙学報』にみる『まなざし』の共有」(第二六回歴史学会大会報告、二〇〇一年一月二五日於日本女子大)。

(12) 成功雜誌社刊。『成功』を扱ったものとして、竹内洋「日露戦争前後の成功ブームとその変容」雑誌『成功』(一九〇二—一九一五)に見る(同『日本人の出世観』学文堂、一九七八年)。同『立志・苦学・出世』受験生の社会史(講談社、一九九一年)、和田敦彦「〈立志小説〉の行方」『植民世界』という読書モード(金子前掲書)、同「〈立志小説〉と読書モード」(『日本文学』四八—二、一九九九年)、関肇「立志の変容」(『日本近代文学』四九、一九九三年)等。また、『成功』のモデル、アメリカの雑誌『サクセス』(Success: 1897—1911)との比較の文脈で『成功』を扱うものとして糸井輝子「日米両国の成功雑誌に関する一考察」(『アメリカ研究』二一、一九八七年)。成功雑誌社には他に『植民世界』『探検世界』等がある。当時の雑誌に大衆的なアジア認識を見出すものとして他に尾崎ムゲン「教育雑誌に見るアジア認識の展開—一九〇〇年代はじめの『教育時論』を中心に」(古屋前掲書)。尾崎は、教員向け雑誌に「国民レベル」が反映されると見る。しかし、「注3」で触れた問題はここにも共有されると。また、近代日本における「雑誌の読まれ方」に着目したものとして永嶺重敏「雑誌と読者の近代」(日本エディタースクール出版部、一九九七年)を参照。

(13) 『成功』が広く読まれていたことを示す事例は竹内「日本人の出世観」一一—三頁。ちなみにライバル誌『実業之日本』は一九〇〇年頃で三〇〇〇部であったという(同上二二頁)。

(14) 同上二三頁。ただし、『成功』誌上に女性読者向けの記事が掲載されることはまれであり、したがって、そこに現れる中国イメージは多くの場合、立身出世を男性固有のものと考えた人々のそれであるということになろう。女性読者については「読者と記者」欄によってその存在を確認できるがごくごく少数。ちなみに同時期同様のコンセプトで女子を対象としたものに『女子成功』(唯文社、一九〇六年刊)。

(15) 「いざない」の主体としての雑誌『成功』、という発想については、和田一九九九年論文に示唆を受けた。また、竹内は『成功』が同時代に「教唆雑誌」といわれていたことを紹介している(竹内「日本人の出世観」一一—頁)。

(16) そこにはときに百通を超える読者からの質問が掲載され、記者は逐一それに対応する。そこからかなり具体的に読者の様態を把握することが可能である。投稿欄が読者及び編集側にとって大きな意味を持っていたことについては成田龍一「『少年世界』と読書する少年たち—一九〇〇年

前後、都市空間のなかの共同性と差異」(『思想』八四五号、一九九四年)。

(17) 木村健二「在朝鮮日本人の「サクセス・ストーリー」(『歴史評論』六二五号、二〇〇二年)は桑井前掲論文を参照し、「成功を唱導するジャーナリズム」として脚注において「成功」に触れている。

(18) 和田二〇〇〇年論文。

(19) 竹内「日本人の出世観」一二四頁。

(20) 同仁会については、丁薔「近代日本の対中医療・文化活動」同仁会研究(1)(4)、『日本医史学雑誌』四五―四、四六一―二・四、一九九九年二月―二〇〇〇年二月)。

(21) この欄の末尾には「科挙廃止」にふれて次のような警句が見られる。「一切の旧習を廃止して、文明的空氣を注入するにあらざれば汝が病氣は快癒せぬぞ」(七一四、一〇〇頁)。

(22) 背景としては、アメリカへの渡航制限が挙げられる(桑井前掲論文)。「記者と読者」欄でも繰り返しの点が強調されている。

(23) 世紀転換期を境に、「受験」を立身の足がかりと考える風潮が顕著となるが、『成功』の「苦学」主義はそれと表裏をなすとされる(竹内「立志・苦学・出世」一三四)。

六頁)。

(24) 基本的に「某年全国各學校受験案内」という形がとられるなか、独立した「案内」として、恒屋盛服「上海東亜同文書院入学案内」(七一五、一九〇五年)、池辺冷泉「上海東亜同文書院入学案内」(二八二、一九一〇年)、同「東洋協會專門學校入学案内」(一五一四、一九〇九年)、山川無涯「台湾國語學校給費生受験案内」(一五一二、一九〇八年)。これらの學校が、官費であることも多くの「成功」読者にとっては魅力であった。また、安定と海外雄飛を同時に求める傾向の中では海外で官僚として名をなした後藤新平などは「成功」にとって重要な「ヒーロー」の一人であったと考えられる(例えば、堀内新泉「大手腕家としての南滿州鐵道總裁後藤新平君」一〇一五、一九〇七年)。

(25) 作者堀内は「立志小説」の第一人者とされている(和田前掲論文)。

(26) そこでは三浦梧楼、頭山滿、犬養毅、三宅雪嶺、福本日南、内田良平、宮崎滔天等の人物評が展開される。

(27) 陸奥「戦後の日本人は如何にせば海外に成功すべき乎」(五一一、一九〇四年、一三三頁)。

(28) 川島浪速の「アジア主義」については趙軍「大アジア

主義と中国」(重紀書房、一九九七年)、第五章。その「侵略」性が厳しく批判される。

(29) 白岩の詳細については中村前掲書、荒尾と白岩の関係については同一〇一―二七頁参照。

(30) ちなみに荒尾精は児童向けの雑誌においてもその中国における活動が青少年のあるべき姿として取り上げられている(『入清の青年』『少年園』五一五二、一八九〇年)。

(31) ちなみに、同じ「いざない」の言説でも、例えば南米を対象とするものは「崇高な使命」を必要としない。そこには「資本がなくとも成功可能な、広大廉価な土地に豊穡な農作物という定型化された表現」が頻出する(和田一九九九年論文)。

(32) 例えば、陸前掲記事。

(33) 中国の「文明化」を掲げる東亜同文書院院長の根津は、にもかかわらず、中国が本場に「文明化」してしまうことを恐れていた。それはひとつには、西洋の進出が容易になるからであったが、同時に、中国が西洋的な意味での非文明状態にあることが、彼等自身の「使命」に輝きを与えることを自覚していたからであったと考えられる(根津一「清国世界的大商戦の将来」一五―三、一九〇九年)。

(34) 「白岩が語る」記事として他に「支那に於ける有望の

工業」(六一四、一九〇五年)。

(35) 珍田捨巳。当時上海総領事。白岩の事業との関わりにについては中村前掲書三五―六頁。

(36) この時期のアジア論にこういった自他イメージを見出すのは容易である。そして、そこでは往々にして自己イメージ成立のために中国イメージが一定の枠のなかに閉じこめられることになるのだ(前掲拙稿二〇〇一年参照)。

(37) 「湖南視察談」(『東亜同文会報告第五回』一九〇〇年四月)、「湖南視察の鄙見」(『近衛篤磨日記』三卷、一月二八日付)。

(38) 嘉納治五郎及び宏文学院については藤山雅博「宏文学院における中国人留学生教育」清末期留日教育の一端」(『日本の教育史』二三、一九八〇年)、同「宏文学院における中国人留学生教育の展開」清末期留日教育の一端」(『斉藤秋男他編『教育のなかの民族』日本と中国』明石書店、一九八八年)。

(39) 文明化の使命論による「いざない」は医学関係の記事にも明確に現れる。例えば、長城覇客「支那医術開業案内」(『成功』六一六、一九〇五年)。「支那今日四億の民衆や、猶ほ其子孫の病氣でう苦痛に陥るを救助すべきは、殆んど日本人が特命せられたる天職の様な状態を為している、日

本の医者なるものはドシドシ支那に行くべしである、否行かねばならぬのである」(四四―五頁)。

(40) こういった傾向が顕著な「アジア主義者」の言説を挙げておこう。例えば、近衛篤磨は、戦勝後の日本人の「恰も欧州人の支那人に対する如き態度」を批判して次のように述べるのである。「夫れ文明の制度を布き、文明の教育を施したるに於ては、日本実に支那の先進たり。故に支那を開導し之を扶植するに文明を以てするは大に善し。独り其先進国たるを以て、自ら負い、支那人を輕侮し戮辱して反つて其惡感を買ふは、實に先進国の襟度に戻るのみならず、対清政略の運為を妨ぐるに極めて大、其禍を後來に

残す」(「同人種同盟、附支那問題研究の必要」『太陽』一八九八年一月)。

(41) 中国近現代史研究の文脈では、「王朝的帝国」が辛亥革命期を経て「近代的帝国」に再編されていくという捉え方が提議されている(深町英夫「中華民国成立期の国家統一問題―多民族支配の正統性」『中央大学論集』一八号、一九九七年、等)。そこでは当然近代批判が射程にとらえられることになるが、こういった成果は「注2」の諸研究とはリンクしておらず、その結果、同じようにアジアの近代を批判的に問題としながら、そこに現れる中国は全く異なった像を結ぶことになっている。